

所属・資格 心理学科・助手

申請者氏名 狩野 武道

研究課題	大学生における無気力の心理学的研究	
報告の概要	<p>研究目的</p> <p>および</p> <p>研究概要</p>	<p>大学生における無気力に関して、スチューデント・アパシー的な無気力と抑うつ的な無気力の2つの視点から研究する。質問紙法により、大学生の無気力状態を調べ、様々な心理学的傾向との関連性を検討し、スチューデント・アパシー的な無気力と抑うつ的な無気力の特徴を明らかにしていく。大学生を対象とし、学業に対する意欲低下尺度、抑うつ気分尺度、自分について考える傾向を測定する尺度、ストレス尺度を実施する。ストレスがかかった時に、どのような心理的傾向と無気力が関連するのかを検討し、明らかにすることを旨とする。この研究結果は、大学生の無気力大学生が陥る無気力状態を支援するための心理学的アプローチを考察するための基礎データとなり、大学生のメンタルヘルス向上に寄与すると考えられる。</p> <p>以上のテーマに従い、本調査では、一般大学生が示すスチューデント・アパシー的な心理状態（アパシー心理状態と呼称）の変動が、「自分について考える傾向」が予測因子となるかどうかを検討する。この結果は、一般大学生のアパシー心理状態の低減や予防を検討する上で役立つと考えられる。</p> <p>調査対象者はX大学の学生103名（男性50名、女性53名、平均年齢19.02[SD=1.57]）であった。大学講義内に集団で質問紙調査を実施した。調査は縦断的に2回行われ、調査間隔はほぼ3ヶ月（Time1は7月上旬、Time2は9月下旬）であった。分析に使用した尺度は以下の3つである。①アパシー心理性格尺度の「張りのなさ」、「自分のなさ」、「味気なさ」（下山, 1995; 全15項目, 5段階評定）: スチューデント・アパシーの特徴的な心理状態である、時間感覚が希薄化し生活に張りのない状態、自分の内的欲求を意識できず自己の意思決定が難しい状態、生活や対人関係上における活気が欠如した状態を測定する尺度であり、本研究ではこの尺度をアパシー心理状態の指標とした。なお、アパシーの性格特徴を測定する下位尺度である「適応強迫」は本研究では除外した。本尺度はTime1,2を通じて実施された。②自己意識・自己内省尺度の自己への「受動的思考」、「能動的思考」（辻, 2004; 各5段階評定）: 自分について考える傾向を2つの側面から測定する尺度であり、「受動的思考」（5項目）は自然と否定的に考える傾向を測定し、「能動的思考」（4項目）は自ら積極的、分析的に考える傾向を測定する。本尺度はTime1に実施された。③対人・達成領域別ライフイベント尺度の「ネガティブライフイベント」（以下NLIと略記; 高比良, 1998; 各15項目, 2件法）: 最近3ヶ月間の対人領域、達成領域（試験やレポート、授業等）別のNLIの有無を測定する。NLIの有無は大学生の無気力の変動に影響する可能性が推測されるため、本研究では統制要因として使用した。本尺度はTime2に実施された。</p>
研究の結果	研究の結果	<p>アパシー心理状態合計得点（Time2）を従属変数、ステップ1としてアパシー心理状態合計得点（Time1）、ステップ2として「達成NLI」と「対人NLI」、ステップ3として「受動的思考」と「能動的思考」、ステップ4として「達成NLI」、「対人NLI」、「受動的思考」、「能動的思考」の組み合わせの交互作用項（中心化を行った後に各々を掛け合わせたもの）を独立変数として投入する、階層的重回帰分析を行った。その結果、「達成NLI」の主効果と、「受動的思考」と「達成NLI」の交互作用、「能動的思考」と「対人NLI」の交互作用が有意であった（それぞれ$\beta=.19, .17, .14, p<.05$）。そこで、「受動的思考」と「達成NLI」の交互作用の内容を調べるため、得られた回帰方程式に「受動的思考」、「達成NLI」の平均合計得点$\pm 1SD$（中心化データに関しては$\pm 1SD$）の値をそれぞれ代入した。また、「能動的思考」と「対人NLI」の交互作用の検討についても先述と同じ方法を用いた。</p>

<p>研 究 の 考 察 ・ 反 省</p>	<p>「達成 NLI」が高くても「受動的思考」が低いとアパシー心理状態の高まりを予防できる可能性が示唆された。次に、「対人 NLI」と「能動的思考」がともに高いとアパシー心理状態が最も低く予測されることがわかった。対人領域のネガティブなライフイベントが多く生起することがアパシー心理状態を予防するように読み取れるが、スチューデント・アパシーの学生は人間関係が希薄であるとの指摘（松原，2003）を考慮すると、アパシー心理状態が高い学生も人間関係が希薄なために「対人 NLI」も起こりにくい可能性が考えられる。以上のことを鑑みると、「能動的思考」が高く、かつある程度親密な人間関係を築いていることが、アパシー心理状態を低く予測する因子となっている可能性が考えられ、今後検討する必要がある。</p>
<p>研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所</p> <p>研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者</p>	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>【研究発表】 学会名：日本心理臨床学会第 37 回大会 テーマ：大学生におけるアパシー心理状態の変動を予測する因子の検討 －自己への受動的思考と能動的思考を用いて－ 発表年月日：2018 年 9 月 2 日 発表場所：兵庫県神戸市</p>